香港便り その31

爆買い外国人になってみた

文　高野 陽年
text by Yonen Takano

香港ではグレゴリウス暦の新年よりも旧正月の方が盛大なイベントだ。香港バレエでも新年の休みはたったの2日間であったが、旧正月休みは2週間貰えたので、その休みを利用して日本に帰省することにした。

珍しく東京に雪が降った日の様子をインスタグラムでシェアをしようとすると、多くの香港人同僚が同じ様子を既に載せているではないか。どうやら僕らは同じ時期に同じ場所にいたようだ。スパイするわけではないが、どんなことを日本でしているのか気になり、しばらく彼らの動向を追ってみた。お洒落なレストランで食事をし、シックな旅館に泊まり、スキーをして、なかなかの豪勢な旅を送っているではないか。一般的にバレエダンサーはそこまで高給取りとして知られているわけではない。ダンサーにとってはかなりの奮発になるんじゃないか。そんな心配をよそに、1人や2人ではなく何人もが香港から日本に訪れ豪勢な旅を楽しんでいるのだ。客観的に分析をしているスタンスをとって偉そうにしている自分も、実は日本では毎日のようにレストランに行き、いいホテルにも泊まった。それは何故か。日本は安いのだ。

例えば、香港で本格フレンチを食べようとすると食事だけで1人、3万円は下らない。飲み物を含めると4、5万はかかってしまうだろう。そんな食事は滅多に行けるはずもない。ところが日本では同等、もしくはそれ以上のものが1万円で済んでしまう。1万円でも随分と高級なのだが香港と比べるとかなりお得な感じがするのだ。香港で高級店に行くよりも日本行きの航空券をとって、日本の高級店に行く方が安上がりになる。お得が何よりも大好きな香港人がそんなチャンスを逃すわけがない。

もちろん日本でも僕がいないうちに物価が上昇したことは感じた。母に頼まれてお使いをした際も食料品が思った以上に高くなっていて驚いたが、それでも香港ドルに計算し直すと普段香港で豚の細切れを800円で買う自分にとっては全てが安いのだ。

世界一高いとされる家賃、物価に押し上げられるように、給与水準がそれなりに高い香港。香港バレエでさえ、物価上昇率が加味されて目立った功績がなくても毎年昇給することができる。非ダンサーである自分のパートナーとの収入を合わせると日本円ではパワーカップルなんていわれる部類に入るらしい。けれどもそれは日本での話で、香港では滅多に外食をせず、弁当を作り慎ましい生活をしている。

芸術が心を豊かにすると信じ、今まで贅沢に興味がないふりをしてきたが、物質的な豊かさを日本に来ることで初めて自分は享受しているようだった。

ところがどっこい、いくら香港に比べて安いからといっても、贅沢を重ねていると、気付いたらクレジットカードの明細がとんでもないことになっていた。『お得』に惑わされたようだ。

やはり自分は芸術的豊かさを追求して慎ましく生きなくてはいけないらしい。来週から弁当生活だ。

Profile

2011年にロシアの名門ワガノワバレエアカデミーを卒業し、世界的振付家ナチョ・ドゥアトの指名を受け外国人初の正団員としてロシア国立ミハイロフスキー劇場に入団。主にドゥアト作品で活躍した後、2014年6月より世界的に絶大な人気を誇るバレリーナ、ニーナ・アナニアシヴィリに引き抜かれグルジア国立トビリシ・オペラ・バレエ劇場に移籍。ヨーロッパ、北米、日本を含めさまざまな劇場における公演で主役を務めた。そして2021年7月より香港バレエ団に活動の拠点を移し、さらに活躍の場を広げている。立教大学中退。